第96号
1985年3月25日

内　容

技術移転の展望……1～2
第11回国際学生セミナ……2～4
第130回大学共同セミナー……4～6
千人会……6
寄付金報告……6
法人ニュース……7
事業部だより……8～9
社会学合同セミナー……8
わたしたちの合宿……9
利用状況……9～10

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木（〒192-03）
電　話　0426-76-8511～3
振替口座　東京5-74590番
編　集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人　中川秀恭
発行人　吉川孔敏
製作　中央公論事業出版

第11回国際学生セミナー
ゲスト講演から

技術移転の展望
――文化圏を超えて――

東京工業大学学長
松田武彦

今回のセミナーのねらいは、科学技術と伝統社会の関わりを軸として、文化圏を超えた技術移転の問題を考察しようとする点にあるが、私はシステム屋として、異文化間の技術移転の問題を分析し、解決する際に役立つと思われるチェック・リストを提案しようと思う。

一、技術移転――日本の経験

日本は西洋からの技術移転に成功して、今日の技術大国を築き上げた。成功の理由を挙げてみるならば、㈠日本は大変な技術吸収力を持っていた、㈡日本の経済は巨大企業と零細企業の二重構造を持ち、後者が過剰な労働力を吸収するシステムとなっていた、㈢日本と西洋の間に適度な技術ギャップがあった、㈣日本は技術の段階を一歩一歩追う必要はなく、技術飛躍できる状態であった、㈤国内の貯蓄だけで工業化を進めるだけの資本蓄積があった、㈥日本文化の二重構造で、異文化との接触や受容に非常に熱心だった一方で、伝統的社会の崩壊はうまく回避してきた、ことなどである。

二、日本の課題

日本は西洋から多くのものを学んできたが、よく学んだわりには、教えることを余りしなかった。今日の日本に与えられた第一の課題は、相手国の技術吸収力を向上させることである。日本の経験によれば、途上国の人たちに初等、中等教育の普及を促すことが重要だと思う。第二は、日本の技術教導力の強化の必要性。日本人は一般にマニュアル作りが下手で、技術伝播も口伝えが多いので、教え方の工夫が必要である。第三には、ソフト技術の伝達の問題。ソフト技術は、ハード技術よりも伝達が困難であり、技術は伝播する時、必ず何かに付着して伝わることを考え合わせれば、今後は日本人の暮し方や考え方を含めた日本文化の輸出が必要になってくると思う。

三、専門家養成の姿勢

これからの技術移転の専門家は、文化を超えて問題を基本的に解決することのできる人材でなければならない。私は「テクニシャン」と「エンジニア」の二つの技術者の層を考えている。途上国への技術移転に際しては、問題ごとに双方が要求されている。以下に専門家を育成する場合に必要な姿勢について検討してみたい。

まず初めに、解答本位姿勢と問題設定姿勢。前者がテクニシャン的で後者がエンジニア的姿勢である。日本人は出された問題を解く時の意欲や能力は非常に高いが、「何をなすべきか」から出発する話となると余り得意ではない。問題設定姿勢が心理的に非常に不安定なプロセスを持った経験であることを考えると、日本人にはもっと心理的なタフネスを持つことのできるような訓練が必要ではないか。

第二に、作業本位姿勢と目的確認姿勢。日本人は作業好きで、すぐに作業にとりかかり、作業をすれば非常に働いた気になる。しかし、資源を有効に使うためには作業目的の検討がいる。問題を本質的に捉えるならば、エンジニア的な目的確認の姿勢が大事である。

第三は、結果本位姿勢と過程追跡姿勢。出た結果について、いくら議論をしても後で変えることはできない。結果を変えるためには、前提条件や環境条件などのプロセスのメカニズムを手直ししなければならない。結果に縛られることなく、結果を生み出した過程とそれにインプットされた条件に注目しなければならない。

第四は、知識本位姿勢と方法尊重姿勢。日本人は既成の知識やノウハウを獲得することには熱心だが、どういうやり方でそれらが出てきたかを余り考えない。エンジニアの場合は、知識を生み出した背後の方法についても理解を持っていなければいけない。

第五は、細目本位姿勢とシステム中心姿勢である。日本人は非常にディテール好きで、細目をたくさん集めれば全体がわかったような錯覚に陥り易いが、エンジニアは、全体的立場から判断を下して、どうすればよいかを考えねばならない。システムとはそうした考え方の一つであり、全体的立場から重点ディテールと非重点ディテールを判別、識別してゆくやり方である。

最後は、実績本位と機会活用姿勢。テクニシャンは普通実績本位の行動をしているのに対して、エンジニアは常に最適のやり方をとることで、その機会を最大限に利用しようとする姿勢を持つ。

以上のようにテクニシャンとエンジニアにはかなり大きな差があり、本格的な技術移転には、エンジニア的考察が不可欠なのである。

四、逐次改良型実践過程
――システムズ・アプローチ

技術移転をする際、最初からよい仕事ができるとは限らないので、徐々によくしてゆくという考え方が重要である。逐次改良型実践過程とは、結果を時々フィード・バックして、実績を目ざす結果になるべく近づける努力をすることであるが、これをシステム的にやるにはどうすればよいのか。以下に、問題設定、システム解析、システム設計、システム実施、システム改良の五つのプロセスを考えてみる。

最初の**問題設定**のプロセスの中で、第一に検討しなければならないのが問題意識の分析である。これは自分が意識していなかった問題を持ち込まれた時に、その持ち込んできた人の問題意識が本物か

（**2ページ3段めにつづく**）

第11回国際学生セミナー

主題＝発展と平和のモデルを求めて

――科学技術と伝統社会――

期日――'84年12月7～9日

＜ゲスト講演＞

東京工業大学学長　松田武彦氏

＜セクション演習＞

A　情報化社会と平和―工業化社会の次に―

上智大学教授　庄野克房氏

富士通研究所川崎研究所情報処理研究部門長　佐藤　繁氏

B　日本の近代化と技術移入―明治における欧米土木技術の移入と日本の社会―

東京大学教授　高橋　裕氏

埼玉大学助教授　長谷川三千子氏

C　経営及び生産技術の途上国への移転

一橋大学教授　山沢逸平氏

石川島造船化工機顧問　桜井清彦氏

D　技術革新と地域開発―適正技術とは何か―

津田塾大学助教授　菊地京子氏

日本工営コンサルタント海外事業本部計画調査部長　沢谷一夫氏

＜運営委員＞

東京工業大学教授　熊田禎宣氏

上智大学教授　庄野克房氏

東京大学教授　中村英夫氏

一橋大学教授　山沢逸平氏

埼玉大学助教授　長谷川三千子氏

日本学術振興会地域交流課長　溝田　勉氏

＜参加学生＞56名（内女子12名）

①国籍別（計12ヵ国）――日本（41）、韓国（3）、タイ、マレーシア（各2）、スリランカ、スウェーデン、フランス、台湾、中国、アメリカ、インド、ガーナ（各1）。

②大学別（計23校）――東工大（10）、一橋大（8）、東大（5）、慶大（4）、専大、津田塾大（各3）、筑波大、上智大、早大（各2）、東京外大、東京農工大、大阪大、青学大、ICU、国際商大、自由学園、成蹊大、中大、東京理大、同志社大、東洋大、武蔵野女大、立大（各1）、その他（3）。

指導教授とともに（ようこそ広場）

◇

いずれの社会も、固有の政治経済体制を有するだけでなく、固有の伝統文化と技術の歴史をもっている。社会と社会が交流を持つよ

（前ページからつづく）

どうかを分析することであり、私は、これを「探りのうまみ」と名付けている。第二は、問題意識の移入。これは周囲がまだ気付いていない時に、自分が問題意識を抱いた場合、どのように回りをその気にさせるかということである。今度はいわば「売り込み」のうまみである。こうして問題意識が分析と移入によって、関係者間で大体統一されたら、第三は、問題領域の想定である。社会的、文化的にどの次元で、あるいはどの資源領域で問題を解決しようとしているのか。これは「読みのうまみ」と言えるが、何が本当に絡んでいるのかを読むことは、技術移転に際しても、大変重要なことである。しかしそのままではシステムが無限に拡大し、収拾がつかなくなるおそれがあるので、解決できるシステムにするために、どこかで切らなければならない。これが第四の「区切りのうまみ」と呼ばれるもので、問題境界の画定がこれに当たる。

次は、**システム解析**であるが、その第一は目的設定である。すでに境界の画定がなされているので、その範囲内で目的を考えてゆく（「狙いのうまみ」）。その場合重要なのは、長期、短期といった色々な目的の階層を考えねばならないことである。第二は、「繋りのうまみ」とも言うべきもので問題に関係する因果関係の集合を抽出して問題を構造化すること。われわれは、しばしば日常言語、数字、図表などのモデル言語を駆使することによって、これをモデル化しているが、特に技術移転の場合には、日本語でどの程度相手に伝達できるかがポイントとなる。第三は、どの部分にどれだけの資源を配分するかという解答立案。有限な資源を有効に使うため、重点的に集中投入する配分計画をたてる（「重点主義のうまみ」）。その場合、特に総花主義と悪平等を排する態度が大事である。第四は、感度分析（「ひびきのうまみ」）の問題。これは条件が変わるのに対応して、結果がどう変わるかということであり、特に社会的、文化的問題を取り扱う場合には非常に役に立つと思われる。

システム解析が終わると、次は**システム設計**の段階に入る。これには、各々「約束のうまみ」と「手はずのうまみ」と呼ばれる構造設計と運用設計の二つがある。前者は、仕事に関わる関係者の間の契約や組織内の約束事である目的や計画を明確に把握して、それらの間に関係を作ることであり、後者は、実績を約束に近づける手はずをつけることである。

次は、**システム実施**。日本人はこの段階は非常に熱心にやるので、余り心配はないが、二点重要なことを挙げれば、一つはシステム設計ができたからといって、すぐに実施しようとしないで、さらに論理的に詰める必要があること。簡単に言えば、誰がやっても間違えないようなマニュアルを作ることである（「論理的詰めのうまみ」）。二つ目は、実施の役割規定。関係者一人一人にどういう役割が期待されているかを伝えて、その気になってもらうこと（「心理的詰めのうまみ」）。仕事をうまく進めてゆくためにはこの論理的詰めと心理的詰めの両者をしっかりと行っていなければならない。

そして最後が、**システム改良**のプロセスである。これは二つのグループによる次のような一連の作業を指す。各々のグループは、互いに相手のシステムがうまく機能しないようにするための方策をたてる。それらを突き合わせて批判し合いながら練り上げることによって、新機会を探求する。そして視座転換を図ることによって問題図の作り直しをするのである。これはシステムの弁証法的ゲーミングのプロセスと呼ばれている。ここまでくると最初から見れば一回りしたわけだが、同じ平面の上で回ったのではない。システムズ・アプローチとは、螺旋状に徐々に上昇してゆくサイクルだからである。これを逐次改良型実践過程とした私の意図は〝段々よくする〟点にあり、技術移転の具体的な問題を考えてゆく際の有効な方法ではないかと思っている。

（文責・編集者）

うになると相互に影響を及ぼしあって変化してゆくが、その場合、科学技術は社会や文化を再構成する力ともなりうる一方、時には伝統文化を破壊し、その地域の発展を妨げ、平和な生活を脅かすこともある。元来、その地域に特有のものを他の地域に移転するためには、どのような方法が考えられるのか。また、文化圏を超えた科学技術の移転が、自分の生活舞台となる社会と、自らのアイデンティ

国際学生セミナーに参加して

●認識の壁を打ち破る対話の場

上智大学大学院理工学研究科修士2年　朴善宇（韓国）

セミナーのテーマと内容は、私だけでなく、現代社会で生活している大学生たちにとって重要なものであった。参加者たちが先生方とともに深夜まで熱心に議論している様子に接して、これが日本人であり、日本の大学生であると思った。私が大学院のコースを修了して帰国した時、私の身のまわりに常にこのような対話の場をもつように習慣づけたいと思う。対話を活発にすることにより、問題に対するお互いの認識の壁をなくすことができると確信した。

「人間にとって大切なことは、文明より文化である」と、私は小さい頃から母親に聞かされて育った。誰でも物質文明の生活を楽しむ権利がある。しかし一方、人間の良心が築きあげてきた精神的文化を、自分の心の中に自分で形成することも大切だと思う。私は、日本の大学生たちが自分なりに「良い文化」を形成するように希望している。

美しい自然環境にめぐまれた多摩の丘で、日本の先生方や学生たちと対話の時間を持ったことを、私は永遠に忘れることはないだろう。

終りに、セミナーを企画し指導してくださった先生方、またこのような機会を与えてくれた大学セミナー・ハウスの皆様方に深い感謝の意を表わしたいと思う。そして、来年もできれば再びこの対話の場に参加したいと希望している。

（Aセクション）

●議論、交流、友情のロータリー

東京大学大学院工学系研究科修士1年　林家彬（中国）

今、私の目の前に大学セミナー・ハウスから送られた写真が置いてある。それを見ていると、セミナーでの生活が生き生きと目の前に浮んで来る。初参加の私にとって、忘れ難いことは、次の三点である。

第一には、真剣かつ活発な議論である。セクション演習や、パネル・ディスカッションにおいて、先生と学生が、皆積極的に自分自身の意見を述べた。私の参加したDセクションは、発展途上国への技術移転を行う際、どのような技術がその国にとって適正な技術であるかについて議論をした。普段、日本の学生との交流が少なかったためかも知れないが、私は、こんなに多くの日本の学生たちが、途上国の発展と進歩に強い関心を持っているのを見て非常に感動した。

第二に、広範かつ多面的な交流である。先生と学生の交流、異なる大学、異なる専門分野の間の交流、実務経験者と理論研究者の交流、日本人学生と留学生の交流など、いずれも普段ではなかなか実現しにくい交流が、この三日間に集中的に、また活発に行われた。これらを通していろいろな概念や考え方を知ることができた。私は、このような交流による「情報と情報のぶつかり合い」は、必ずや学問の進歩に有益だと信じている。特に、このセミナーに参加した日本と各国の学生たちは、それぞれの国の将来を担うべき人材ばかりなので、この機会を利用して互いに理解を深めることも大変有益だと思う。

第三に、満ち溢れていた友情である。初対面であったのにみんな気楽に声をかけ合って話を進めることができた。私も何人かの友達ができた。別れる前夜、同じセクションの学生同士で深夜三時まで話し合い、送別昼食会後八王子の喫茶店で楽しく歓談したことも、強く印象に残っている。

最後に、ただ一つ残念なことは参加者数が、定員の四分の三弱であったことだ。これからはもっと宣伝に力を入れて、この貴重な学習と交流の機会を、より多くの学生たちに利用してもらいたいと思う。

（Dセクション）

●国際関係の縮図

同志社大学法学部4年　中村登志哉（日本）

大学の掲示板で偶然、ポスターを見て、いままで考えたことのない技術移転について、話を聞くのも良い経験だくらいの軽い気持で私は京都からでかけてきた。だから、大学院生の方々やアジア各国からの留学生たちの真剣な表情を見た時には、正直言って圧倒された。

シンガポールで一八年間、造船技術の移転に当ってこられた桜井先生の体験談を中心に私の属したCセクションの話は進んだのだが、その中で大きく認識を改めさせられることがあった。それは技術移転が、技術という「モノ」の問題というよりも、むしろ、移転に携わる人間の問題だということだ。

「いくら立派な技術や物があっても、そこにいる労働者が、組織としてうまく働いてくれなくては意味がない」と桜井先生は言う。技術移転がテクノロジーの問題にとどまらず、文化や社会構造にまで裾野を広げていることに、今さらながら驚いた。

技術を移転する立場に立たされることが多くなった日本と移転を受け入れることの多いアジアの途上国。それぞれの母国の立場が参加者の発言に微妙に影を落としながら、議論は白熱した。少しオーバーかもしれないが、国際関係の縮図をみる思いがしたのは私だけではないと思う。

最終日の送別昼食会で、アジアの留学生に囲まれて、疲れも見せずほほ笑んでいる桜井先生が印象的であった。シンガポールでの技術移転に成功した先生は今また、自らの体験から学んだことを若者の心に「移転」することに成功したのではないか。私はそう思った。

（Cセクション）

ティと深く関わる文化に活力をもたらす鍵は何か。

従来、国際学生セミナーのテーマが、文科系に偏りがちであったとの反省に立ち、国際プログラム委員会は慎重に討議を重ねた結果、今回のテーマを選定した。発展途上国からの留学生が多い理工系の学生も参加できるようにとの配慮からである。また、特に技術移転の抱える現実的課題をリアルに描き出すため、講師には大学人ばかりでなく、実際に現地に赴き移転に携わってこられた企業人をペアで配するという特別の工夫が試みられた。

参加者の総勢が56名にとどまったことには、例年、10月末に開催していた期日を12月にずらしたことや、準備段階に派生した事情で、募集期間が短縮されてしまったことなどが考えられるが、結果として12ヵ国から15名の外国人の申込みがあったことは、予想に違わずこのテーマに対する留学生の問題意識の高さを示している。

セミナーの企画と実現にあたり、委員長として多大の労をとられた熊田禎宣氏をはじめ、運営委員諸氏に対し、この紙上を借りて厚く感謝の意を表する。

◇

プログラム初日は、開講式に続き、各指導教授がセクション演習の方向づけを行う共通セッションで幕を開けた。以下はその要旨である。

▼Aセクション

農業社会や工業化社会の次に来る情報化社会では、どのような問題が生じてくるか。平和、宗教（イデオロギー）、文化的生活の三つの視角から、情報化社会の本質に迫ってみる（庄野克房氏）。

▼Bセクション

日本が欧米近代技術を移入した明治期を振り返り、日本の成功の要因を掘り当てたい。また、そこから普遍的に妥当する成功要因を探し出せるかをも、併せて考えてみたい（長谷川三千子氏）。

▼Cセクション

私が手掛けてきたのは、技術を〝移植〟することではなく、相手の中にある芽を見つけ、それを育てることであった。私が技術移転

（次ページへつづく）

（前ページ5段めからつづく）

を行う際に念頭に置いてきたことを次の世代に伝えたい（桜井清彦氏）。

現在、技術やサービスのような目に見えないものの国際間の移動が問題になっている。日本の輸出が途上国の社会、文化と色々な摩擦を起こしている現実を踏まえ、望ましい移転の姿を探る（山沢逸平氏）。

▼Dセクション

新しい技術が、伝統的価値体系や社会秩序に適合的に移転されるためにはどうしたらよいか。主として移転される側の視点から考える（菊地京子氏）。

技術移転の成否には、教育水準の問題など、受け容れる側の様々な条件が絡んでいる。仕事を通じて得た経験を紹介しながら、移転の抱える実際的問題にアプローチする（沢谷一夫氏）。

◇

二日目は、午後からゲストの松田武彦氏による講演が配された（要旨はフロントページに掲載）。システム家らしく簡潔にして要領を得たお話は、技術移転を考える場合のフレームワークと、実際に行う際のセルフチェックのためのリストを提供した。

お茶の時間をはさんで、プログラムは指導教授全員の参加によるパネル・ディスカッションへとバトンタッチされた。

初めに司会の中村英夫氏が、以下の三点に問題の焦点を絞り、議論のための道を整えた。

「技術は常に固定された〝先進〟地域から〝後進〟地域に、一方的に流れるのか」、「地域格差は常に縮められなければならないのか」、「移転の方法論と共に、何のために技術を移転するのかが重要ではないか」。

これに対して、フロアーも交えて積極的な意見交換があったが、中でも「技術移転は、与える側と受けとる側の間にコモン・インタレストがあるところに成り立つ。まず第一に共通の接点を見つける努力が必要」、「移入する側と同時に、受けとる側の主体性が問題。自分たちが必要とする技術を是が非でも吸収しようとする積極性が大事であり、輸出国はあくまでも脇役に徹し、輸入国が主役でなければならない」など、技術を「移入する」側と「移入される」側の基本的な姿勢の問題をめぐって、討論は大きな盛り上がりを見せた。特に、発展途上国の留学生にとっては、切実な課題であったせいか、彼らの活発な発言が印象的であった。

◇

最終日は、学生の自主的運営に任され、セミナーの総括として演習報告と自由討議が正午過ぎまで続けられた。

「なぜ、このような場でこうした問題をとり上げるようになったのかとの根本的な認識が重要」という留学生からの問題提起に触発され、移転する側からは「技術協力や経済協力の名を借りて、一方的な押しつけをやっているのでは」との反省が聞かれ、また、受け容れ側へは、「新しく技術の担い手になるということは、学んだ技術を使うだけではなく、新たな技術を開発し、技術自体の性格を変えてゆくことでなければならない」との認識が示された。特に、「ただ単に一方的に教える技術〝移転〟よりも、お互いに持っているものを出し合い、ぶつけ合って何かを得てゆく技術〝交流〟のほうが大事。技術移転をする側は、教える姿勢だけでなく、自分もそこから何かを掴みとってこようとする気構えが重要だと思う」という韓国からの留学生の発言は、多くの参加者の共感を得たようであった。

今回のセミナーを通して、「学生が何を学びとったか」は別掲の参加学生による感想文が余すところなく伝えている。閉講式での桜井氏の指摘にあったように、「古のシルクロードが絹や茶を運ぶことを通じて、東西文化の交流を促したが、技術移転は現代のシルクロードになるかもしれない」。

こうして三日間にわたるセミナーはその幕を閉じたが、明けて1月には東工大の熊田研究室で運営委員と参加学生有志による反省会がもたれ、また報告書の編集委員会が逐次開催されるなど、交流の苗床は、着実に育っている。

第130回大学共同セミナー

主題＝科学ジャーナリズムの現実を問う

期日——'84年12月15～16日

＜全体講義＞
科学ジャーナリズムの成立
東京大学講師　中山　茂氏

＜シンポジウム＞
I　科学ジャーナリズムの現実
II　市民・ジャーナリスト・科学者—その望ましい関係を探る—

＜発題者＞
毎日新聞編集委員　牧野賢治氏
『日経サイエンス』編集長　餌取章男氏
三菱化成生命科学研究所研究員　米本昌平氏
学習院大学教授　江沢　洋氏
（司会）

＜セクション演習＞
A　日本における科学ジャーナリズムの貧困—欧米との比較—
『科学』編集部　粒良文洋氏
『科学朝日』記者　三浦賢一氏
B　科学ジャーナリズムは何をなすべきか
NHK解説委員　赤木昭夫氏
C　科学ジャーナリズム批判—市民のための科学メディアとは—
東京大学講師　中山　茂氏

＜運営委員＞
学習院大学教授　江沢　洋氏
早稲田大学教授　戸沼幸市氏

＜参加学生＞41名（内女子8名）
東大（4）、名古屋大（3）、千葉大・慶大・明大・学習院大（各2）、東工大・東学大・電気通信大・東北大・奈良女子大・茨城大・日大・ICU・東理大・工学院大・産能大（各1）、その他（15）

◇

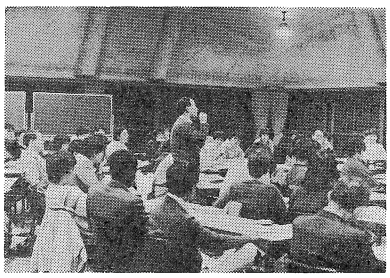
遺伝子組替え、核融合、試験管ベビーあるいは科学万博等々、科学・技術をめぐる話題が近年にぎやかだが、それを伝える科学ジャーナリズムの現実はどうか。科学者と市民のパイプ役たるジャーナリストはいかにあるべきか。第一線でご活躍の科学者、科学ジャーナリストを中心に市民を交えて、様々の角度から議論することが本セミナーの主旨である。今回は17大学26名の学生の他に、雑誌・新聞等の編集者や記者15名の参加があった。

◇

セミナーは開講式に続いて、科学史に造詣の深い中山氏による全体講義から開始した。氏は科学ジャーナリズムの成立事情を〝ジャーナリズム〟の源流と〝近代科学〟の成立史をからめながら次のように語る。

＜全体講義＞……**中山　茂氏**

ジャーナリズムの起源は、ギリシャ民主制におけるソフィストらの＜説得術（レトリック）と論理＞というオーラル・コミュニケーションに求められようが、十全な意味でのジャーナリズムは、こうした伝統の上に〝紙〟と〝印刷技術〟

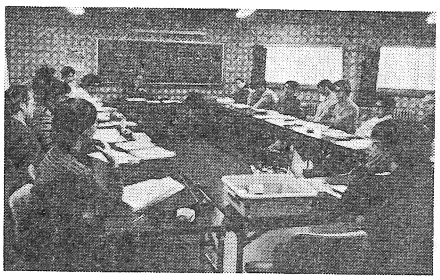


留学生の発言に触発されて

の発達があってはじめて成立する。一方、科学が見世物的なものからより客観的で、普遍的な「近代」科学へと転化するためにはそうしたジャーナリズムの成立なしには考えられない。

ジャーナリズムと近代科学は相補的な成立史的関係にあったわけであるが、19世紀後半のドイツに典型的に見られるように、科学者が大学の研究所で活動する（アカデミズム科学の成立）ようになると、もはや科学者はジャーナリズムを通じて社会と接する必要がなくなり、興味を失う（アカデミズムとジャーナリズムの分化）。近代科学はしだいに巨大化・複雑化の道を歩む。第二次大戦後は、国家介入による科学の軍事化傾向が強まり、科学の公開性が制限されるに至る（アカデミズム科学の体制化科学への変質）。

今日の科学ジャーナリストは、科学の非公開性のなかで科学者が提供する情報を無批判的に市民に伝達するのではなく、市民生活の向上という観点から〝一言論人〟として批判的に情報を伝えることが望まれる。



"送り手"と"受け手"の対話
（セミナー室）

◇

続くシンポジウムは、第一線で活躍中の科学ジャーナリストの牧野・餌取・米本の三氏の現場報告から始まった。「科学記者は確かに増えているが、科学記者を横断する組織がない」「科学との緊張関係すなわちクリティーク機能が脆弱だ」「歪曲された科学情報を修正する回路がない」等々。科学ジャーナリズムはアシロマ会議（一九七五年）での遺伝子組替え問題に対する発言以降、社会的に重要な役割を担いはじめたといわれているが、日本ではいまなお、その現実は貧困である、と三氏は異口同音に主張された。

シンポジウムの後半では、ジャーナリストによって浮彫りにされた現実像を踏まえて、今度は受け手の側からの意見が出された。科学政策に対する報道の不十分さ、ジャーナリズム界におけるオフレコの処理の問題等々、活発な意見が出されたが、今回のセミナーのテーマを設定するに当って伏線となっていたグラフィック・サイエンス誌の評価については、きわめて冷静に過不足ない評価を下していることがわかった。

プログラムはシンポジウムの後、夕食を挟んでテーマ別のセクション演習、翌日午前中に第二回の演習、そして最後に締めくくりの全体会議が行われた。

◇

セミナーで終始論争点になったのは、㈠科学ジャーナリズムの役割としてのクリティークの必要性、㈡メディアの多様性と受け手のニーズ、㈢科学者・ジャーナリスト・市民の望ましい関係のあり方、の三点であった。

㈠　今の科学ジャーナリズムは〝玄関口ジャーナリズム〟に堕しているのではないか。科学政策が公式に発表される前に、市民が政策をアセスメントできるように情報を提供すべきだ。これに対して、雑誌でいえば販売部数、テレビでいえば視聴率という経営体としての大きな制約があること、受け手側にこうした情報に対する要求や反応が少ないこと、事前に情報を察知することの困難さ、等がジャーナリストから指摘された。

もちろんこうした制約のもとでも科学ジャーナリズムがジャーナルである限り果さねばならない使命はあるはずだ。「科学的啓蒙が善であり、一般大衆は所詮耳障りとならないような科学情報しか求めていない、という日本における大衆蔑視のイデオロギーの中で、諸官庁→公共予算→企業という科学政策のメカニズムを批判的に報道する必要がある」（米本氏）。「特に科学の成果である技術は、政治的・経済的条件に大きく左右され、非公開性をもっているので、ジャーナリズムは技術が市民生活にどういう影響を及ぼすのかという視角から報道しなければならない」（餌取氏）。「軍事技術を中心に国家介入による科学政策が問題になっている今日、ジャーナリストは分かりやすく、しかも近づきやすく記事を作る工夫をしてほしい」（中山氏）。

㈡　高度に専門分化した科学情報を市民に分かりやすく伝達することは難しい。科学者は平易な表現で第三者に説明する術を身につけていない。アカデミズムとジャーナリズムの分化の中で、種々のグラフィック誌が科学ジャーナリズム界を席巻し、科学情報を平板なものにしている。ところが、こうした現象も受け手から見れば、表現方法の違いでしかなく、グラフィック誌のレベルが低く、学術論文中心の雑誌のレベルが高いという階層を立てるのはおかしいのではないか、ということになる。科学情報を様々の階層の市民に伝達するためには、平易さ・おもしろさをモットーとするものから、精確でしかも批判的なものまで種種のメディアが共存していることが望ましい。コマーシャリズムとセンセーショナリズムが雑誌の存立を左右するという現実の中で、地道に情報を提供しているメディアの活動を科学者や市民は忘れてはならないだろう。

㈢　科学者・ジャーナリスト・

（次ページ4段目へつづく）

実現した専門職業人の交流

出版社勤務　藤田　明雄

八王子の丘陵地帯の一角に大学セミナー・ハウスがあることは、私が大学生であった頃（今から十七年くらい前）から知っていた。だがどういうわけか、在学中に訪れた経験が一度もない。学科やクラブの友人たちが、セミナー・ハウスで何かやろうと提案したのを聞いた記憶がないのだ。共同セミナーのような催しにも参加したことはなかった。

社会人となってからはじめて大学セミナー・ハウスを訪れ、私の現在の仕事に深くかかわるテーマの大学共同セミナーに参加できたことは非常によい経験であった。

このセミナーの各プログラムで提出され議論された問題点の多くは、仕事を通して日頃同僚たちと話し合っていることである。しかし、仲間同士少人数の議論では尽せない何ものかを見出せるのが、このようなセミナーの意義であろう。

とくに今回は、社会人しかも同じ目的を志向する人たちの参加が多く、意外と横のつながりのない同業者から生の声を聞くことができたのは一つの収穫であった。一方、われわれの生産物の受け手である学生諸君からの発言は、活発ではあったが、こちらが期待していたほどの送り手に対するきびしい注文は少なかったようだ。また一日目所定のプログラム終了後、深夜に及ぶ個別的な雑談の中で、かえって本質的な問題が飛び出したりするのは、宿泊して行うセミナーではよくあることだが、これも大切なことかもしれない。

近年、社会人の学校教育への参加がいろいろなところで話題になっている。それは普通の学生にとっても、また当の社会人にとっても有意義なことと思われる。大学セミナー・ハウスでも、今後ともこのような機会を多く作ってくださることを希望したい。

◆千人会……'84年12～1月

◇新しく会員となられた方々

5名〔第76回報告（申込順）〕

A　東京農工大学教授　高谷　卓成殿

C　沖縄天久神の教会牧師　折田　政博殿

C　同志社大学法学部四年　中村登志哉殿

B　青山学院大学教授　金　台烋殿

C　一橋大学教授　堀部　政男殿

◇会費ありがとうございます

村井資長、田村皖司、関龍夫、木村増三、田村光三、新井益太郎、斉藤国治、高橋浩爾、慶伊富長、外池孝雄、谷重雄、内藤正、岡本敏雄、多田隆、茂木誠陸、西巻正郎、今井哲哉、岡惺治、近藤保、坂口順治、池川郁子、茅伊登子、藤村瞬一、杉山吉茂、和田木松太郎、池田温、横山実、清水誠、半谷高久、浮田久子、大倉謙二、小西正捷、濱川祥枝、中野卓、三浦安子、笠井伍朗、田島澄江、来住正三、沼田滋夫、川喜田二郎、藤林宏一、吉永フミ、宮川松男、平松幸一、中尾信之、中尾由矩子、三井爲友、高木仁、大内英吾、安味貞正、大塩俊介、増田義男、岡崎正、西田亀久夫、瀬川渡、佐々木邦彦、岩尾裕純、山科高康、伊藤学、山鹿誠次、市川惇信、伊藤文人、市川孝正、佐藤豪、折田政博、石田孝夫、福原満洲雄、横沼健雄、三浦永光、石山伍夫、有山正孝、中鉢正美、桑原哲郎、徳久球雄、天野成光、川端香男里、宮本勉、遠藤健治郎、上山硯、石井明、高橋恒郎、杉山好、合田信子、鈴木皇、武田昌輔、大蔵隆雄、瀬野信子、一番ヶ瀬康子、竹内啓一、岡田清、大口勇次郎、澤孝一郎、斉藤耕二、大羽滋、若山邦紘、木村康雄、猪瀬博、清水啓三郎、東川清一、小菅敏夫、竹林代嘉、扇谷尚、青井和夫、佐藤進、青柳総太郎、石井素介、栗原尚子、森山俊雄、楯吉彦、塚本利明、中富光国、平木典子、武藤義夫、深沢実、後藤聰一、米川哲夫、師岡孝次、佐藤公子、高橋源次、細谷千博、園田義道、古田勝久、伊藤洋、田中英夫、篠崎武、新井明、大森東亜、相原光、小谷正雄、吉川孔敏、根岸愛子、慶谷壽信、柳父圀近、刈田元司、小山弘志、乾崇夫、若林貞雄、磯野修、松山正男、小林清子、箱木真澄、茅野良男、加倉井茂樹、佐藤音彦、藤巻正生、関口晃、小俣武夫、高橋昭三、山崎俊雄、小川洋輔、上谷琢之、山田辰雄、白井泰四郎、川喜田愛郎、池井優、今井伸子、須田精二郎、永積昭、河田敬義、松原元一、原増司、萩原玉味、柳沢冨雄、京極純一、飯田修一、鐘ヶ江信光、金子ハルオ、

◎◎◎ 千人会員からの便り ◎◎◎

ハウスからのおたよりに、実り多いご発展を拝見し、いつもおよろこびいたしております。

会費をお納めできることを幸とし、仕事に専念しております。

沼津工業高専校長　慶伊富長

＊

永年の課題であった学位論文を提出することができました。それを記念して、ささやかな増額。

東京学芸大学教授　杉山吉茂

＊

83回目の誕生日を迎えました。昭和47年4月、千人会員にしていただいた当時は、毎年八王子駅から歩いて山を登り会費を納めさせていただきました。さすがこの頃はその元気はありませんが、毎日事務所へ通い仕事をしております。

弁護士　原　増司

●寄付金報告

'84年12～'85年1月

＜教育プログラム資金＞

10,000円　第5回社会学合同セミナー参加者一同殿

30,300円　第11回国際学生セミナー参加学生一同殿

30,000円　第130回大学共同セミナー参加者一同殿

＜一般寄付＞

30,000円　第10回国際学生セミナー平野滋朋殿

8,233円　59年度フロント募金箱

＜植樹資金＞

10,000円　日本航空電子工業管理職研修会殿

30,000円　石井素介・鴨澤巌殿

●寄贈図書

'84年5～12月

「Asian Culture」36　ユネスコ・アジア文化センター殿

「老人問題の今日的課題」「ガンと安楽死」「社会学論叢」91　笠原正成殿

「経済を囲むシステム―『前期』」　長尾史郎殿

「記号論への招待」「文化記号論への招待」「現代英語文法」「意味論」「意味の世界」「ことばの詩学」「記号論」Ⅰ～Ⅱ　池上嘉彦殿

「フランス資本主義研究序説」「大学改革の先駆者―橘静二」　原　輝史殿

「一般教育学会誌」6巻1号　一般教育学会殿

「国際交流」37　国際交流基金殿

「さて、これからどうする」　専修大学二部事務課殿

（前ページからつづく）

市民の三者は、一方向的な上意下達の情報の流れであってはならない。ジャーナリストは科学者に教えを乞うのではなく、科学者とは異なる角度から（例えば、「市民の社会生活の向上」）問題を提起し、科学者に刺激を与えることができる位であることが望まれる。個別分野に内在する論理矛盾や技術的障害などの情報は外部に出にくい。こうした情報こそ市民に伝えられなければならない。ジャーナリストは科学者と同等の知識水準を獲得する努力なしには、科学と社会の真のパイプ役たりえないのではないか。

今日、科学技術の急速の進歩は一面、人間のすばらしい未来を予告するものではあるが、他面、そこに至る過程には多くの困難が予想される。科学技術がもたらすバラ色の未来像だけが拡大再生産されている科学ジャーナリズムの現実は看過できない。科学と社会を結ぶチャンネルは多様でなければならないが、それ以上に重要な点は、科学ジャーナリストの職業倫理なのではないだろうか。

科学ジャーナリズムが、はじめて共同セミナー委員会の話題にのぼったのは、昭和58年3月のことであった。物理学者・江沢洋氏の中に芽ばえた問題意識が、今回の企画に結実した。科学ジャーナリズムが公開の場で真正面から議論されたのは、恐らくこのセミナーがはじめてのことであったろう。

この二年間に『自然』をはじめ二、三の科学雑誌が休刊に追い込まれるなど、科学ジャーナリズムの周辺には江沢氏の予見どおり厳しいものがあるが、今回のセミナーは、現代社会における＜科学と人間＞のほつれた関係を修復する糸口を我々に与えてくれた。

年の瀬のあわただしい時期で、参加者は必ずしも多くはなかったが、科学ジャーナリスト・科学者・市民の三者が対話し議論したことの意味は極めて大きいといえよう。

セミナー終了後、早速、牧野氏は毎日新聞（12月22日）の『メディア情報』欄で「科学者と市民がもっと科学ジャーナリズムに関心を高め、関与していくことも必要だろう。科学ジャーナリストを含めたこれら三者の望ましい関係があってこそ、科学・技術の発展が保証されるだろう」と今回のセミナーを報告して下さった。また、参加者からも数通の感想文が寄せられたが、紙面の関係で一通だけ紹介しておきたい（5ページに掲載）。

法人ニュース

昭和59年度 第2回大学教員懇談会 企画委員会

'84年12月20日／東京ガーデンパレス

〔出席者〕井早康正、岡嶋道夫、小池生夫、根岸愛子、蠟山道雄、岩波一寛、佐藤保、絹川正吉、宮腰賢（敬称略）

◇

別記九名の委員に、ハウス側から中川館長、吉川専務理事、企画室スタッフ二名が出席して開かれた。

はじめに、第21回懇談会「時代の変遷に伴う大学の将来像（その II）―大学はこれでよいのか」の実施報告が、運営委員の一人、宮腰氏より行われた。

これを受けて井早委員長から、懇談会の内容を「大学教育への提言」のかたちにまとめて、臨時教育審議会に提出してはどうか、という提案がなされた。

次に資料に基づいて、飯田主事が大学教員懇談会の歩みを概括し、大学教育をめぐる議論の展開の中で、この懇談会が担ってきた役割を跡づけた。

以上をふまえた上で各委員から様々な意見が出され、協議の結果、次のように決定した。

まず、①臨教審への対応としてはこの懇談会はこれまでに様々な提言をしてきたわけであるから、持ち合わせの資料（懇談会記録書、新聞に報道された記事など）を提出するだけでも十分意味がある。②懇談会の討議を何らかのかたちで総括することは、大学教育の変遷を知る上に極めて有効であるので、20周年記念事業として小冊子の刊行を考えたい。

なお、②については小委員会（仮称・起草企画委員会）を設けることとし、小池生夫（慶大）、堀部政男（一橋大）、佐藤保（お茶の水女大）、絹川正吉（ICU）、宮腰賢（東京学芸大）の五氏が委員に選出された。

引きつづいて次年度の企画についての協議に移り、種々の意見が出されたが、第22回懇談会を〈開館20周年記念企画〉として開催すること、テーマは「大学の社会的役割―問われる大学・問う大学―」とすることで意見の一致を見、運営委員に井早康正（電通大）、蠟山道雄（上智大）、根岸愛子（東女大）、村上陽一郎（東大）、岩波一寛（中央大）の五氏を選出した。

大学教員懇談会記録を臨教審の審議資料に提供する

昭和45年9月に発足した大学教員懇談会はすでに二一回実施され、そこで行われた討議内容は、各回ごとに記録として当ハウスから刊行されている。

特定のイデオロギーによらず、国公私立の枠を超え、専門も異なる大学教員が、大学改革論を皮切りに入試、国際交流、大学間交流、外国語教育、一般教育、大学院教育、学歴社会、等々の大学問題を真剣に議論してきた記録である。

本年度第2回の大学教員懇談会企画委員会で、こうした共同の場における討論の成果を、臨時教育審議会の審議に反映させることを考えてはどうか、という提案が出された。この間の事情については別掲の同委員会の記事を参照されたい。

これを受けて企画室では、第1～20回までの記録を一五セット用意し、館長と委員長の連名の文書を添えて高等教育担当部会に提供することになった。残部のないものについてはコピーをとり、合本し、表紙をつけ、一セット6分冊にまとめる作業が行われ、仕事納めの28日、総理府に赴き、臨教審事務局に届けた。

交友館の運営上の基本方針決まる

――運営委員会の審議を経て――

昭和53年5月、キリンビールのご寄付によって落成した交友館は、キャンパスの中央に位置するハウスのサロンとして、交流と憩いの場を提供しており、利用者の方々に好評である。

もともと営利を目的とするサロンではないが、これを維持していくためにコンパによる収益に頼りすぎると、本来のサロンの雰囲気がそこなわれるなど、理想と現実の間で苦労もある。

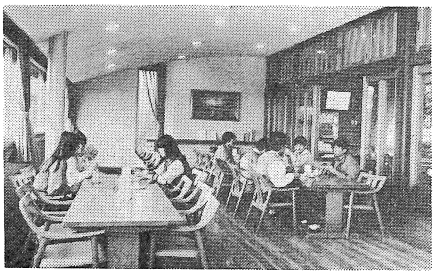
また、一方ではこのような懇親の機会が各種の研修活動にとって有効な交流の手段となることも無視できない。要は、その持ち方であろう。いわばハウスの目的に即して、全館的な視野の中で運営がなされることが必要である。

さらには、アルコール類を提供する交友館が最大限に活用されるのは、夜の9時以降の時間帯であるから、職員の就業について考慮すべき点が生じてくる。

交友館の経営は昭和53年12月から食堂（有限会社）に委託されているが、法人の運営委員会は理事長の諮問を受けて、運営上の基本方針について審議を重ねてきた。2月4日、法人側と食堂側との話し合いが行われ、いくつかの点を確認し合った。利用方法に関する事項は以下のようである。

◎アルコール類のサービスは午後6時から、11時閉館を厳守するため、オーダー・ストップは10時40分とする。

◎大小のコンパが重なる場合の処置とし、少人数のゼミは大学院セミナー館の使用を考慮して、宿舎村のセミナー室への持ち込みを防ぐ。



交友館……研修の合い間に憩いと交流の場を提供している。

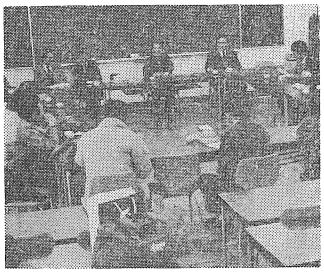
「物理　ブックガイド100」　江沢　洋殿
「英語英文学と共に」　荒井良雄殿
「ソ連中国憲法の構造」　斉藤　寿殿
「上代たの文集」　同文集編集委員会殿
「大学とスタディスキルス訓練」　林　潔殿
「アジア文化の再発見」　国学院大学日本文化研究所殿
「世紀末御伽草子」　堀江珠喜殿
「カウンセリングQ&A」　国分康孝殿
「労働と所有」　阿部　弘殿
「リーダーズ英和辞典」　松田徳一郎殿
「英米文学評論」30　東京女子大学文理学部殿
「開戦前夜のディスカッション」　国際教育振興会殿
「全国私立大学白書　58年度」　尾形　憲殿
「学生相談室」　平木典子殿
「雨夜譚」　長　幸男殿
「塔の旅」　佐原六郎殿
「遊牧の民　ベドウィン」　片倉もと子殿
「ファミリーズ　欧米の家庭、日本の家庭」　杉田弘子殿
「国際経営と人間問題」　桜井清彦殿
「IDE」256～257　民主教育協会殿
「私大七七七の未来」　尾形　憲殿
「財務会計の基礎と展開」　染谷恭次郎殿
「都市の復権と都市美の再発見」　法政大学国際交流センター殿
「歴史と未来」11　中嶋ゼミの会殿
「金融経済」206～209、「産業革命期の金融」　金融経済研究所殿

●事業部だより

'84年12月・'85年1月 年末・年始のキャンパスから

12月は、冬休みを利用しての合宿で賑わった。卒論の中間発表を含むゼミの合宿、学科単位の合宿セミナー、大学連合の研究集会、国際セミナーなど、多彩である。今年も、一年を八王子での合宿で締めくくろうという〝常連〟の諸グループをお迎えできる幸せに感謝し、無事越年することができた。

一方1月は、学年末試験を前に、大学関係の利用は最低に。特に今年は、1月末に実施された「共通一次」の影響で、例年この時期に来泊されたいくつかのグループが2月に移動したこともあり、同月の利用率は二〇%を下回った。一年で最もゆったりとお過しいただけ、また遠い山なみが一番くっきりと身近に眺められるこの季節の活用を、ぜひ一度ご検討いただきたい。



早大哲学研究科・川原ゼミ
(大学院セミナー館)

	グループ数	宿泊延人数(人)	定員比(%)
12月	一〇一	三、一一八	四三
1月	四四	一、一八四	一六

●年末の合宿から

来泊グループと指導教授のお名前を別掲の「**利用状況**」でご覧いただきたい。前記のとおり、その多くがこの季節の〝常連〟である。「国際法演習」の高野雄一・上智大教授は今冬も「一泊二日で大学での三〜四週間分の勉強に相当する」合宿を学部と大学院と連続二回実施された。12月の第二週は今年も〝早大ウィーク〟。開館当初からご縁の深い川原栄峰教授は大学院哲学研究科の合宿(**上掲写真**)で来泊、また還暦を迎えられた染谷恭次郎教授のゼミ合宿は一八回目である。

年々12月なかばに欠かさず来泊されるグループの一つに原誠・東京外大教授による「スペイン語学概論」の合宿がある。'75年以来の連続、今年で一〇年目を迎える。二泊三日、集中的な〝授業〟の合い間に、毎年遠足や夜のミーティングなどを組み入れ、人間的な交流にも力を入れてこられた。本号の『わたしたちの合宿』(**別掲**)では、原教授に年末定例の合宿の模様をご紹介いただいた。

●恒例の各種国際セミナーで賑わう

12月初旬の週末、満席の食堂は各国の留学生らを混じえて国際色も豊かであった。ハウスの第11回国際学生セミナーが進行中に、またまた第8回日豪合同セミナーが

▼社会学合同セミナー▲

定着した学生「主体」の運営

準備委員長 **小椋政宏**

一昨年、「社会学合同セミナー」を学生主導に移行させた先輩たちや、昨年それをさらに徹底させた四年生らの、積極的な協力・鼓舞によって、今回、学生「主体」の「社会学合同セミナー」は一応定着したと思います。招待された先生から「僕らの発言の機会も設けてほしい」という意見が出てくることは、これを裏付けているといってよいでしょう。

その先生方からは一様に「成功である」との言葉を頂いたのですが、「主体」としての学生の側から見ると、いったいどうだったでしょう。

問題点としては、ひとつには一人ひとりの学生の準備不足ということがあります。通常ゼミ活動に加えて、共同研究や共通テキストの読み込み、さらに運営委員には膨大な事務的な仕事があり、ただもう時間が足りないということによる場合が多かったようです。

もうひとつ挙げるとすれば、学習と交流との二律背反、というと変な話ですが、要するに「交流」に夜遅くまで励めば翌日の学習がおろそかになりがちだということです。

にもかかわらず、「成功」だったと思うのは、次の理由によると思われます。「発見」とは、それまで関係ないと思っていた二つのことを関係づけてみることから始まるでしょう。参加ゼミの研究は、それぞれ領域が大きく違っており、当然参加者の問題関心は、大きく異なっていましたが、そこにおいて、各人が自らの問題関心に新たな見方を加える可能性をもっていたと思います。

今回は、新たに専修大学からの参加がありましたが、私たちの社会学合同セミナーのような企画が他所でも多元的に組織されていけば「学生社会学会」も決して夢ではありません。それぞれが横に連絡をとりあって、広い範囲での「学生組織」を作ることができると思います。(法政大学小林ゼミ3年)

インターゼミの収穫と今後の課題

慶応義塾大学山岸ゼミ3年 **唯是昌彦**

この種の大きなインターゼミにおける収穫というのは、①普段自分たちのゼミが手をつけていない研究領域に触れることができること、②同じ研究領域やテーマであっても、目新しい意見が得られること、③勉強し、それをまとめて人前で発表することは、漫然と一人で勉強するよりも遥かに多量かつ深い勉強と理解がなされるということ、以上三点に収斂するだろう。そして今回の合同セミナーで、その三点がどの程度果たされたかは、個々人によるだろうが、運営そのものは、合セミ委員の方の驚くべき行動力によって、極めて良い流れがとれたように思われた。

だが、今後のことを考えて、それ以外の点に関して、少し意見を述べておこう。①理論系ゼミのテーマはもっと小さくしたほうがよい。「主体性について」とか「近代化について」のような膨大なテーマは、まずプロの研究者の一生の仕事であって、半年そこそこの勉強ではまとまり得ない。大テーマを考えてゆくのは大切だが、それを真っ向からテーマにすると、努力の割りには焦点ボケでお粗末になり易い。「ウェーバーの〜について」「理念型について」といったような、地味だが、今後の土台となるようなものがよいと思う。これは全体のテーマについてもいえる。②調査のゼミは、ただ調査経過を延々と読みあげることに力点を置くばかりでなく、方法論、その適応の枠組を明確化して、また、今回の調査をすることで個別的な結論が得られるならば、それが普遍的な問題(宗教とは何か、といったような)とどう結びつくのかを鮮明にしたほうが、何のためのどんな調査だったのか理解し易い。③発表内容に関する先生方との対話の場が欲しい。今回は田中先生のみが、駆け足で短い時間の中でコメントをして下さったが、先生側からのコメント、それに対する学生側からの質問の場をつくるべきだ。学生が学生に対してするコメントだけでは、質の高いものへと発展しない。

以上、私の卑見が、もし多少とも次回に考慮されれば幸いである。

行われたからである。後者は前者（第3回国際学生セミナー）に参加したオーストラリア人留学生五名が中心となって一〇年前に実現した「日豪関係セミナー」が発端。いまや日豪間〝民際交流〟の一拠点として知られ、今回も留学生、大使館員、ジャーナリストを含む両国各界の関係者約一〇〇名が参集している。期せずして所縁（ゆかり）ある二つのセミナーの同時開催であった。

なおこの他、12月には恒例の二つの「国際」セミナーが実施された。七ヵ国の留学生と日本人学生が異文化間の相互理解を求めて交流した七年目の慶大・小池国際セミナー、そして韓国人講師らと「日本の中の国際」などを討論した年末最大規模（一八二名）、恵泉女学園短大英文学科四年目の「国際」セミナールである。

●新春の合宿から

'85年新春の〝初利用〟は、駒沢大電気美術部と「石井・鴨澤両先生還暦記念社会地理研究会」の二グループで、ともに〝仕事始め〟の週末5日午後に入館された。前者は八名で、ハウス利用一七回目のサークル。後者には、竹内啓一・一橋大教授ら全国各地からの先生方三四名が参加された。

続く第一週には、恒例一六年目の東京神学大主催の「教職セミナー」が開催され、これにも新春早早全国各地から牧師、院生ら九〇名が参集、二泊された。この時期、同じく一六回目の玉川大・若槻ゼミは今年も四泊の合宿を、また村田全・立大教授はシンポジウム「数学の基礎に関する歴史的諸問題」を実施された。学年末試験の影響で最も閑散となる1月末には、高階秀爾・東大教授が大学院の「美術史ゼミ」で、中本正智・都立大助教授がゼミ合宿で今年も来泊された。ともに厳寒期七年以上のハウス利用である。

●第5回社会学合同セミナー

12月初頭にかかる週末、社会学合同セミナー「現代社会における個人と主体性」が開催され、四大学（慶応、法政、明治学院、専修）五ゼミからの九七名（うち指導教授五名）が参加した。同セミナーは通算で五回目、うち最初の三回はハウス主催のプログラムとして行われ、四回目から〝自主ゼミ〟として独立。今回も各大学からの準備委員を中心とする学生主体の企画・運営で大学間相互交流の実を上げた。準備委員長の小椋政宏君（法大）と参加者の唯是昌彦君（慶大）から別掲の感想文を寄せていただいた。

◆わたしたちの合宿◆
教室での触れ合い以上のものを求めて

――10年目の「スペイン語学概論」合宿

東京外国語大学教授　原　誠

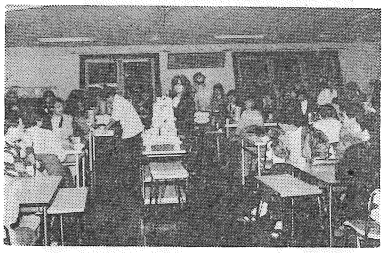
私がここ一四年間担当している「スペイン語学概論」は音声学に始まって、方言学、ロマンス語学を経て統語論、意味論、対照分析に至る、合計一〇種の下位分野から成っていて、それぞれの下位分野の説明に3週間ずつ費すので、序論を含めて合計三一回の授業が必要になる。文部省は大学の講義が年間三〇回行われるよう指導しているようだが、実際に三〇回行われることはまずない。この点を、今から一〇年前に東外大の当時の山本教務課長補佐にこぼしたところ、セミナー・ハウス利用を勧められた。そこで何回の授業が不足かが判明する12月の中旬に、その不足分を補う授業を同ハウスで行うことにし、一九七五年から実施しているので、今年で一〇回目を迎えたことになる。

国立大では全国で二番目に規模の小さい東外大とはいえ、一般に教師と学生との触れ合いは教室での授業を通じてのみである。しかし私のこの授業は選択制であり、関心のある学生のみが履修する。したがって私としてもそういう学生たちと膝を交えて話してみたい気が起きる。うまいことに、セミナー・ハウスでは教師は学生と寝・食・浴を共にでき、学生とのスキンシップを養う絶好の機会である。しかもこの授業はほかにコンパの機会を設けていない。したがって二泊三日の合宿のうち、授業は四コマ程度――毎年意味論と文体論がこの時期に当る――で切り上げて、二日目の午後は高尾山などへの遠足にあて、夕食後は二晩ともミーティングにあてている。

年末2泊3日のスペイン語学合宿を終えて（第2群宿舎村）

また、三年生主体の科目なので、そろそろ就職が心配になるらしく将来の進路相談を受けることもあるし、東外大スペイン語学科のカリキュラムへの不満をぶつけられることもあるし、はたまた私がなぜスペイン語の教師になったかという、一晩ではとうてい答えられないような重大質問を喰らうこともある。

どういうものか私はセミナー・ハウスでの学生一人ひとりの言動を記憶していて、その学生の結婚式に招ばれた時にハウスでの思い出を披露することが多い。きっとそれほどハウスという環境がわれわれにとって印象深いのであろう。そうでなければこの合宿が一〇年も続くはずがない。創立者の飯田元館長はもちろん私にとって忘れられない人であるし、また事業部の綿引さん、食堂の酢屋さん、堀口さんには、お邪魔するたびにこの上なくお世話になっている。ハウスのなお一層のご発展を願ってやまない。



クリスマス夕食会（11グループ・230名）で食堂手作りのケーキにナイフを入れる。

歳末助け合い募金報告

12月に実施した恒例「歳末助け合い募金――心身障害の子らに励ましのカンパを――」には、五六グループの来泊者の方々から一一万四、〇六四円をお寄せいただきました。

総額一三万一、九一五円は、28日、多摩丘陵の一角にある島田療育園の園児たちに届けられ、感謝をもって受領されましたことをここにご報告申し上げます。

ご協力ありがとうございました。

（取扱い・フロント係）

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰り利用を除く

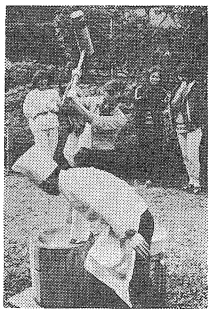
■12月

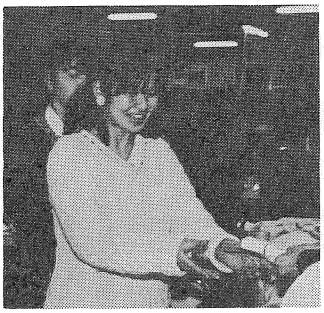
（101グループ、延三、一一八人）

東京都立大学教授　金澤　孝文
中央大学経済学会
法政大学教授＊　五味　健吉
明治学院大学教授　中山　弘正
明星大学教授　井村　君江
東京都立大学教授　坂元　忠芳
立教大学教授　香原　志勢
成蹊大学文学部文化学科Ⅱ類卒論
オリエンテーション
上智大学教授＊　高野　雄一
駒沢大学教授　小林　英夫
日本大学教授　瀬在　良男
千葉大学教授　中村　達也
慶応義塾大学教授　山田　辰雄
東京電機大学教授　八木沢壮一
東京都立大学飛田・山崎研究室合同ゼミ

中央大学教授　工藤　恒夫
東京大学助教授　坂部　恵
東京都立大学教授　野沢　豊
明治大学助教授　長尾　史郎
明治学院大学教授　増田　茂樹
東京都立川短期大学教授　吉田　幸弘
東京都立大学教授　下山　瑛二
東京都立大学教授　伊藤　文人
中央大学教授　矢部　浩祥
中央大学講師　山本　武利
早稲田大学教授　染谷恭次郎
早稲田大学教授　村田　勝彦
早稲田大学教授　平澤　茂一
早稲田大学教授　鴨　武彦
一橋大学教授　山崎　昭
中央大学教授　五井　一雄
明星大学助教授　鯨井　俊彦
早稲田大学教授　川原　栄峰
早稲田大学助教授　村上アプタン
法政大学教授　田中　尚夫
電気通信大学教授　荻原洋太郎
東京都立大学教授　山住　正己
早稲田大学教授　勝村　茂

慶応義塾大学教授　唐木　圀和
慶応義塾大学教授　小池　生夫
東京経済大学教授　色川　大吉
一橋大学教授　田内　幸一
日本大学教授　高瀬　暢彦
東京都立大学平田・広瀬研究室合同ゼミ　瀬戸岡　紘
駒沢大学助教授　大木　義路
早稲田大学助教授　石丸　晶子
東京経済大学教授　畑　聰一
芝浦工業大学助教授　小川　哲生
明星大学助教授　小田中敏男
都立工科短大教授　原　誠
東京外国語大学教授
早稲田大学大頭・小松研究室
恵泉女学園短期大学英文学科総合講座「国際」合宿セミナー
慶応義塾大学佐藤・安藤・川口・徳岡研究室　木村尚三郎
東京大学教授
東京工業大学榎木・米崎研究室
中央大学法律研究会　太田　卓
法政大学教授
上智大学Ad-Hoc ITC　吉田　倬郎
工学院大学助教授　藤澤　好一
芝浦工業大学助教授　厚東　偉介
立正大学教授　上野　淳
東京都立大学助教授　広瀬　鎌二
武蔵工業大学教授　山下　幸夫
中央大学教授　山川　仁
東京都立大学講師　田村　皖司
杉野女子大学教授　藤井　良三
東邦大学教授
高千穂商科大学学友会
東京純心女子短期大学音楽科卒業修養会　深澤　俊昭
神奈川大学助教授
桑沢デザイン研究所
第5回社会学合同セミナー
第11回国際学生セミナー
発展方程式研究会
第130回大学共同セミナー
国際学生シェイクスピア連合
古代解放運動史研究会
金曜会
第8回日豪合同セミナー（日豪学術文化センター）
国際ロータリー青少年交換委員会
ローテックス275
日本OR学会
文学教育研究者集団
オリンパス光学工業
富士鉱油
阿部興業
酒井薬品
日東電気工業
日本損害保険協会


年末の餅つき
―杵をとる田村杉野女子大教授


"新成人"に記念品を贈呈
―夕食時の交歓会で

日本航空電子工業
オリエント時計
沖電気工業
小西六写真工業
〔個人利用〕
日本リフト　金井ハツエ
東洋大学教授　堀　光男
沖縄天久神の教会牧師　折田　政博

■1月
（44グループ、延一、一八四人）
早稲田大学政経学部自主ゼミ　長岡　亮介
駒沢大学電気美術研究部　高橋　和宏
津田塾大学講師　稲垣　寛
東京都立大学助教授　都留　春夫
東京都立大学教授　師岡　孝次
国際基督教大学教授　五井　一雄
東海大学教授　林田　新二
中央大学教授　田島　信元
電気通信大学教授　徳久　球雄
東京外国語大助教授　狩野　紀昭
早稲田大学講師　松原　康雄
東京理科大学教授　須田精二郎
明治学院大学講師　中本　正智
工学院大学助教授　高階　秀爾
東京都立大学助教授
東京大学教授
東京外国語大助教授　多和田真一郎
東京神学大学第16回教職セミナー
文教大学教授　木名瀬信也
玉川大学教授　若槻　泰雄
石井・鴨澤両先生還暦記念の会
チトクロームP―450研究会
数学の基礎に関する歴史的諸問題シンポジウム
建築設備耐久性研究会
TIME研究会
アイワールド＊
日本楽器製造
日本電気
宇部興産＊
沖電気工業＊
シャープ家電
オリエント時計
岩崎通信機
京王百貨店＊
多摩中央信用金庫
富士電機
〔個人利用〕
玉川大学助教授　甲斐　隆
東京大学大学院生　松本　高志
京都大学教授　山口　昌哉
工学院大学助教授　大沢　敏行

●編集後記

校友館前庭の彼岸桜が、今年も見事な花を咲かせました。この桜は故上代たの先生のご郷里・島根の産で、校友館落成のお祝いとして先生が植えられたものです。満開の花の下で、職員が交互に集まって午後のお茶を楽しみました。先生のご命日が4月8日であるのも、花のお好きだった先生にふさわしく思います。

二〇年間に利用者の方々が植えて下さった多くの記念樹も立派に育ち、若芽が春を告げています。（能）

予告

▼第6回大学共同セミナー
主題　＜関係性＞の原点を求めて
――現代社会における合理性の再構築――
期日　6月21～23日
＜ゲスト講演＞
小説の中の「私」――虚構と現実――　作家　古井由吉氏
＜全体講義＞
I　社会関係と意味
法政大学教授　田中義久氏
II　＜関係の理論＞への助走
東京大学教授　見田宗介氏
＜シンポジウム発題者＞
宮島喬（フランス）、塚本三夫（アメリカ）、栗原彬（日本）の諸氏

▼第22回大学教員懇談会
――開館20周年記念――
主題　大学の社会的役割――問われる大学・問う大学――
期日　6月8～9日
＜記念講演＞
京都大学数理解析研究所教授　広中平祐氏
＜シンポジウム発題者＞
ブリジストン・サイクル会長　石井公一郎氏
丸紅専務　小島正興氏
安立電気開発本部研究部長　小池龍太郎氏
電気通信大学教授　西尾幹二氏
上智大学教授　垣花秀武氏
国際大学副学長　細谷千博氏